

# 日々の祈り

2022年2月7日(月)～12日(土)

宮崎中部教会



<はじめに>

それぞれの日々の生活の中で、神さまに心を向け、御言葉を聞き、祈りをもって過ごしましょう。教会のために、兄弟姉妹のために、隣人のために、祈りを合わせましょう。

<使い方>

毎日の御言葉を、可能であれば声に出して、二回以上読んでみましょう。御言葉をじっくりと味わい、聖霊に導かれるままに、祈りの時をもちましょう。

<今週の祈りの課題>

- ・来週の宮崎中部教会創立 97 周年を覚えて感謝。  
これからも主に喜ばれる礼拝を守り、宮崎の地の人々の祝福を祈りつつ、福音の前進のために仕えていくことが出来るように。
- ・兄弟姉妹が喜びの内に信仰生活を歩めるように。
- ・教会から離れている人々が、礼拝に立ち帰ることが出来るように。
- ・求道中の人々に信仰が与えられるように。

7日(月)

ルカによる福音書 20 章 46 節

「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣をまとって歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。…」

昨日の御言葉を思い巡らしましょう。わたしたちは、人の目を気にして、人に評価されることよって、自分の立場や誇りを保とうとすべきではありません。神さまはわたしたちの存在そのものを、そのまま、わたしの目にはあなたは価値高く、尊いと言って下さり、御子イエスさまの命を与えるほどの価値があるものとして見つめて下さっているからです。ですからわたしたちは、この神さまの眼差しにこそ心に向け、神さまを見つめつつ、神さまに喜ばれる歩みを求めていきたいのです。

8(火)

エレミヤ書 9 章 22～23 節

主はこう言われる。知恵ある者は、その知恵を誇るな。力ある者は、その力を誇るな。富ある者は、その富を誇るな。むしろ、誇る者は、この事を誇るがよい／目覚めてわたしを知ること。わたしこそ主。この地に慈しみと正義と恵みの業を行う事／その事をわたしは喜ぶ、と主は言われる。

神さまは、「目覚めてわたしを知ること」を誇れ、と言われます。天地の造り主であり、慈しみと正義と恵みの業を行われる方。この方がわたしの神であり、わたしを愛して下さる方であり、わたしを救って下さる方であると知っていること。これ以上の喜びはなく、これ以上に誇れることはありません。そして今、わたしたちはこの方を知っており、このことを誇る事が出来るのです。

9日(水)

ペトロの手紙一 2章9節

しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

驚くべきことが語られています。わたしたちは、選ばれた民であり、王の系統を引く祭司であり、聖なる国民、神のものとなった民である、と。これは、この世のどんな地位よりも、どんな名誉よりも、誇りに思うべきことです。しかし、そのような者とされたのは、わたしが他の人よりも優れ、特別だったからではありません。神さまが、罪深く何の取り柄もないわたしを、それでも選び、愛し、救って下さったからなのです。このわたしたちを聖なる者とすることがお出来になる神をこそ、わたしたちは誇るべきです。

10日(木)

詩編 51編 18~19節

もしいけにえがあなたに喜ばれ／焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら／わたしはそれをささげます。  
しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ、あなたは侮られません。

神さまは、わたしたちの心をご覧になっています。わたしたちがまことの心で、全身全霊を向けて、神さまの御前に立つことを求めておられます。それは、まず神さまの方が、わたしたちを深い愛の御心をもって見つめて下さっているからであり、まず神さまがわたしたちに対して心を尽くし、まことを尽くして下さっているからです。

11日(金)

歴代誌上 29章 14節

このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう、わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。

次の主日礼拝の御言葉です。旧約聖書の時代、神さまを礼拝する神殿を建てるために、神の民は多くの寄進を献げました。しかし、ダビデは神さまの御前で、献げたものは、本来すべて神さまからいただいたものであり、命を与え、養い、生かして下さっている神さまの御手から受け取ったものを、差し出したにすぎません、と言います。献げ物は、わたしたちに与えられたすべてが、神さまのものであること、そして自分自身もまた、神さまのものであることの、感謝と献身の「しるし」です。

12日(土)

ルカによる福音書 21章 3~4節

「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

明日の主日礼拝の御言葉です。生活の必要を十分確保し、余裕のある中から献金した者と、乏しい中から生活を神さまにすべてお委ねしつつ、恵みに信頼しつつ、全てを献げた人がいました。これは生活費や収入の何割を献げればよいか、という問題ではありません。神さまが喜んで受け取ってくださるのは、どのような心で御前に立って献げることか。献げ物とはいったい何か。そのことが問われているのです。

聖句：日本聖書協会『聖書 新共同訳』